

大阪商業大学学術情報リポジトリ

ボランティアの参加動機と年齢の関連からみる青年 期以降の向社会的動機づけ — 青年期までの発達プロセスとの比較 —

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学教職課程委員会 公開日: 2023-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上床, 幸太, UWATOKO, Kota メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1583

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ボランティアの参加動機と年齢の関連からみる 青年期以降の向社会的動機づけ

—青年期までの発達プロセスとの比較—

上 床 幸 太

1. 序論：青年期以降の向社会的動機づけについて論じる意義
 - 1-1 青年期までの動機づけの発達に関する理論
 - 1-2 向社会性とその動機づけの発達に関する研究
 - 1-3 本稿の問題意識
2. 向社会的動機づけの一例としてのボランティア活動への参加動機
 - 2-1 ボランティア活動への社会的注目
 - 2-2 ボランティアの定義
 - 2-3 ボランティアの参加動機の構造
3. 青年期以降も射程に入れた動機づけ理論
 - 3-1 Socioemotional Selectivity Theory
 - 3-2 ボランティア活動への参加動機と年齢との関連
 - 3-3 青年期までの発達過程との比較

1. 序論：青年期以降の向社会的動機づけについて論じる意義

本稿の目的は、青年期以降の向社会的な動機づけの発達について、ボランティア活動への参加動機を軸に論じることである。「これまでの研究では、動機づけの発達の變化が生じるのはほぼ青年期前期までであり、それ以降は成人として、同じ動機づけメカニズムで説明ができるにとらえられてきた（高崎、2019）」。本稿が示すのは、ボランティア活動への参加のような向社会的な行動に対する動機づけについて、青年期と中年期以降とで重視される要素が異なる可能性である。そのうえで、この差異について、青年期までの動機づけの発達過程と比較して論じる。

本節では、まず青年期までの一般的な動機づけの発達について簡単に整理し、青年期以降の動機づけの発達に関する研究が少ないことを確認する。次に、こうした状況が向社会的な行動とその動機づけの発達において同様であることを示す。最後に、昨今の社会状況から求められることについて確認し、ボランティア活動への参加動機を軸に青年期以降の向社会的な動機づけを論じる意義について述べる。

1-1 青年期までの動機づけの発達に関する理論

「これまでの研究では、動機づけの発達の變化が生じるのはほぼ青年期前期までであり、

それ以降は成人として、同じ動機づけメカニズムで説明ができるととらえられてきた(高崎、2019)」。動機づけ理論についてはこれまでに数多くの研究がなされている。青年期までの動機づけの発達過程について、本稿では高崎(2019)をもとに、乳児期におけるイフェクタンズ動機づけからマスタリー・モチベーションへの変容と、マスタリー目標とパフォーマンス目標の比重の変化という2つの契機を取り上げる。

White(1959)によれば、人は環境に効果的に関わりたいという生得的な欲求を持っており、その欲求を満たすための行動に対する動機づけを「イフェクタンズ動機づけ(effectance motivation)」と呼ぶ。すなわち、乳児は特定の目標に方向付けられておらず、環境に主体的に働きかけ変化をもたらすことができたという漠然とした効果自体を求めるとされる。イフェクタンズ動機づけは、徐々に習熟や達成といった特定の目標を目指すマスタリー・モチベーションへと変化する。その契機となるのは生後9ヶ月ごろにみられる探索行動の質的变化であり、1歳代後半ごろにみられる外的基準の導入である。その後も認知的な発達や自己概念の発達に伴って、より高度なスキルや知識を駆使することで到達できるような複雑で難しい課題への取り組みに動機づけられるようになる。こうした個人内の能力の向上を目指すマスタリー目標は、学齢期に入るころまでは優勢であるが、それ以降は次第にパフォーマンス目標の比重が大きくなる(Anderman et al, 2002)。その変化に影響を与える要因として、能力観の発達の变化と学校での経験が指摘されている。

このように、青年期に至るまでの動機づけの発達の变化については、生来的に持つとされる環境と関わることそのものへの動機づけが、認知能力の発達や社会的な価値観の取り入れを経て、次第に能力を向上させるというマスタリー目標、さらにはそうした能力がある而他者から認められるというパフォーマンス目標というように、徐々にその性質が変容し、比重が変わっていくことが明らかにされている。しかし、青年期以降にどのように動機づけが発達していくかについての研究は、青年期までのそれと比べて少ないように思われる。

1-2 向社会的性とその動機づけの発達に関する研究

向社会的行動の動機づけについても同様に、青年期以降の発達を扱っている研究は多くない。青年期までの向社会的性の発達過程については、鹿子木(2014)に詳しい。鹿子木(2014)によれば、向社会的性はまず、乳幼児期には生来的で内的に動機づけられる。幼児期以降においては、社会的規範や他者との直接的な相互作用による社会化、内集団・外集団への共感が可能になる認知能力の発達、実世界あるいはメディアを通じた暴力性との接触経験などの要因が絡み合いながら、向社会的性の性質が変容する。すなわち、幼児期以降の向社会的性は、選択的で戦略的な援助行動を伴うようになり、強者/弱者への選好性を示すようになる。

より具体的に言えば、児童期においては、単に困っている人を助けるべきであるというような規範的な価値観だけではなく、向社会的にふるまうことができるかという効力感についての認知が、向社会的な行動の生起に影響するようになる(伊藤、2004)。また、青年期初期には、向社会的行動の対象がたとえば家族や友達の場合と知らない人の場合とで、関連する向社会的動機づけが異なるようになる(山本・上淵、2021)。知らない人への向社会的行動は、家族や友達への向社会的行動に比べて自律的な向社会的動機づけとより弱く、統制的な向社会的動機づけとより強く関連する。つまり、青年期初期の向社会的行動は、行動の価

値が内在化された動機づけよりも、外的な要因による非統制的な動機づけとの関連が大きくなると考えられる。

このように、生来的に動機づけられていた向社会的行動は、社会的な規範の取り入れや認知能力の発達等に伴って、その動機づけも変容することがわかる。しかし、青年期以降、成人期や中年期、老年期に至る過程で、向社会的行動の動機づけがどのように変容するかについて扱った研究はあまりない。

1-3 本稿の問題意識

ここまで見てきたように、青年期以降の動機づけの発達についてはこれまでの中心的なテーマであるとは言えず、向社会的な動機づけについても同様であると考えられる。しかし、少子高齢化が進行して久しい昨今の社会状況において、青年期以降の発達も射程に入れた生涯発達の視点が近年ますます重要視されるようになってきている。さらに、近隣住民の互助的なつながりが失われる中で、地域コミュニティの役割への期待や居場所づくりの重要性、自助グループへの注目など、人と人とのつながりを現代的な状況の中で、なおかつ従来とは異なる形で担保することへのニーズも高まっているように思われる。こうした社会状況を踏まえると、社会に本格的に参画していくことになる青年期以降において、向社会的な動機づけがどのように発達するかという問いは重要な意味を持つと考えられる。

そこで本稿では、青年期以降の向社会的な動機づけについて論じることを目的とする。その際、具体的な題材としてボランティア活動への参加動機を取り上げる。なぜボランティア活動への参加動機を軸に論じるかについては、次節で議論する。

2. 向社会的動機づけの一例としてのボランティア活動への参加動機

青年期以降の向社会的動機づけについて論じるうえで、ボランティア活動を軸とすることは有用である。なぜなら、ボランティア活動は社会的な注目を集めており、青年期以降の向社会的行動の典型例として一般的にイメージしやすいと考えられるからである。本節では、まずボランティア活動が社会的注目を集めるに至った経緯を簡単に確認する。次に、本稿におけるボランティアの定義を確認する。最後に、その参加動機の構造について整理する。

2-1 ボランティア活動への社会的注目

ボランティア活動は社会的な注目を集めている。今日の日本において、さまざまな社会活動に積極的に参加する人が増えているが、その中でも1995年の阪神淡路大震災以降、ボランティア活動への関心が高まっており（坂野ら（2002）、石本（2004））、ボランティアは我々の身近なものとして認識されているといえるだろう。国民生活選好度調査（内閣府国民生活局、2011）によると、全国に居住する15歳以上80歳未満の男女の50%以上が今後ボランティア活動に参加したいと回答し、さらに60%以上がボランティアやNPOなど市民活動による社会的サービスを利用したいと回答している。さらに、全国各地にある社会福祉協議会において把握されているボランティア活動参加者数は、1994年の調査では約500万人であったのに

対し、2005年には約740万人となり、調査の始まった1980年から2005年までの25年間で、4.6倍に増加している（全国社会福祉協議会、2002）。これらの調査結果からも、ボランティア活動への関心の高さと、活動のニーズが高まっていることが示されているといえる。

2-2 ボランティアの定義

ボランティアという言葉にはさまざまな定義があるため、まずそれらを確認した上で、本稿におけるボランティアの定義を定めておきたい。西川（2000）によれば、ボランティア（Volunteer）という言葉の語源はラテン語のvolō「意志・欲する」であり、そこから派生したvoluntusという「自由意志」を意味する言葉に、人名称の-erをつけてできた言葉がボランティア（Volunteer）である。日本では現在のボランティアにあたる活動を行っていた人は「篤志家」と呼ばれ、一部の裕福な家庭の主婦や名士、大学生などの奉仕活動をする人がそれに相当していた。しかし、近年ボランティア活動がより一般的な活動になったこと、また「他者への援助を自発的にする人」に相当する言葉が日本語にはないこと、さらにその活動が多岐にわたり多様性を増していることから、従来「篤志家」ではなく外来語の「ボランティア」がそのまま定着しているとされる。

ボランティア活動の特性として、3つの原則がある（木村ら、2007；伊藤、2011）。すなわち、誰かほかの人に強制されたり頼まれたりすることなく、自らの意志ですすんで活動を行うという動機に関する原則である自発性、営利的な目的を持たず、活動の報酬を受け取らないとする無償性、そしてボランティア活動を通じて仲間同士や対象者と温かい交流関係を築き、そういったふれあいから人と関わる喜びを得るという連帯性の3つである。したがって、ボランティア活動とは「営利目的でない（無償性）、自発的に行われた（自発性）、他者へのかかわりを強める（連帯性）活動」と定義できる（西川、2000）。

しかしその一方で、前述の通り最近のボランティア活動はその内容や活動形態が多様化し、交通費や実費を支給される「有償ボランティア」や進学・就職を目的としたボランティアというように何らかの利益を追求したものも増加している傾向にある（三好、2004）。こうした最近の傾向をうけて、安島（2003）は「様々な活動形態をとるボランティアを一義的に捉えることは困難」であり、また「限定的に捉えることはかえって現実的把握を妨げる可能性がある」ため、ボランティアを「営利を目的とせず、社会の福利向上のために自発的に貢献しようとする人々」とし、「有償ボランティアについては必要経費等を受け取ることが活動の主目的ではないため、ここではボランティアに含めるものとする」と定義している。

以上のように、ボランティアの定義は多様であるが、本稿では昨今のボランティア活動の内容や目的の広がりやを考慮し、安島（2003）の定義を用いてボランティアを考える。

2-3 ボランティアの参加動機の構造

見知らぬ他者のために多くの労力を費やし何か行動を起こすという行為はこれまで多くの研究者の興味の対象であり、ボランティア活動はその端的な活動として、活動参加への動機についてこれまでさまざまな研究が行われてきた。西川（2000）によれば、「ボランティアの参加動機はなにか、これはボランティアの研究の中でもっとも重要な課題」である。ボランティア活動の動機について、過去20年分の日本で行われた実証的研究に注目し、整理を試

みた伊藤（2011）によると、ボランティア活動の動機は、その特徴である無償性および自発性から、愛他的で他者志向的な側面が目され、自己の利益に基づかない利他的動機によって行われるものとされてきた。しかしその一方で、スキルの獲得や新たな交流のきっかけになるなど、自分に何らかの見返りが期待できるためにボランティア活動に従事するという利己的動機の存在も指摘されており、ボランティア活動の参加動機として利他的動機と利己的動機に概念的に分類する2因子説が一般的となっている。

Claryら（1992）は、ボランティアの参加動機に関する既存の研究を概観し、ボランティア活動への参加動機を欲求充足の観点から要約することを試みており、この結果ボランティア活動がその参加者に対して果たす機能として①「価値機能（value）」、②「知識機能（understanding）」、③「社会的機能（social）」、④「経歴機能（career）」、⑤「防衛機能（protective）」、⑥「強化機能（enhancement）」の6つの機能を想定し、これらを下位領域とするVolunteer Function Inventory（以下、VFIとする）を開発している。この尺度は各5項目ずつ、計30項目からなる。

伊藤（2011）は、これらの6つの領域を利他的動機と利己的動機の2つに分類するという観点から、利他的動機に近いものとして、ボランティア活動によって自分の価値観や主義を表出する「価値機能」を挙げる一方、ボランティア活動が新しい経験や知識・技術の習得を可能にするとする「知識機能」や、経歴に箔をつけたり新しい仕事のチャンスを与えてくれるとする「経歴機能」は、実利的・現実的な報酬をボランティア活動から得ようとするという点で利己的動機に対応していると述べている。さらに、ボランティア活動をすることによって嫌な気分を忘れられたり寂しさを感じないでいられたりするといった「防衛機能」や、ボランティア活動を通じて自分が必要とされると感じたり自分自身のイメージがよくなるというような「強化機能」は、心理的な報酬を得ようとする動機と対応しているとも述べている。

なお、坂野ら（2002）はVFIを日本語訳して日本の大学生を対象に質問紙調査を行い、確証的因子分析によって最終的に6因子2次モデルがおおむね当てはまることを確認しており、VFIが欧米と日本という異なる社会文化を背景とする対象者にも通用する概念であるという交差妥当性を確認している。坂野ら（2004）は対象者を一般地域住民のボランティア活動参加者に拡大し、6因子2次モデルを確認している。

3. 青年期以降も射程に入れた動機づけ理論

前節までで2つのことを確認した。ひとつは青年期以降の動機づけの発達に関して、これまであまり研究が行われてきておらず、向社会的な行動の動機づけについても同様であること。もうひとつは、青年期以降の向社会的動機づけを探るうえで、向社会的行動の典型例としてボランティア活動を捉え、その参加動機を調べることの有用性である。本節ではまず、青年期以降も射程に入れた動機づけ理論としてSocioemotional Selectivity Theoryを紹介する。続いて、この理論をベースにしたボランティア活動への参加動機と年齢との関連を調査した研究を提示し、向社会的な行動に対する動機づけについて、青年期と中年期以降とで重視される要素が異なる可能性を示す。最後に、この差異について青年期までの動機づけの発

達過程と比較して考察を加える。

3-1 Socioemotional Selectivity Theory

Socioemotional Selectivity Theory (以下、SSTとする)とは、Carstensen (1995) が提唱した動機づけの理論である。身体的な危険から身を守るというような生存していくための基本的な目標から、知識・経験の獲得や感情の調整、自己概念の確立などの心理的な目標まで、人間がもつさまざまな人生上の目標について、人生の段階によってどの部分に重点を置くかということによって、その人の社会的な関わりへの動機付けが決定されるという理論である。

Carstensen (1995) は、さまざまな人生上の目標のうち知識や経験の獲得 (Information seeking) と感情の調整 (Emotion regulation) に注目した。そのうえで、人生の段階を幼年期・青年期・中年期・老年期と4つに分け、その段階による変化を以下のように述べている。つまり、知識や経験の獲得への欲求は、幼年期から青年期にかけて上昇し青年期に最も高くなる一方で、中年期、老年期と年齢を重ねるごとに低下していく。これに対し、感情の調整への欲求は、逆に幼年期から青年期にかけて低下し青年期が最も低くなる一方で、中年期、老年期と年齢を重ねるごとに上昇していくとしている。この人生の段階による目標の重点の変化には、年齢による残された時間の認識がかかわっているとされている。たとえば、若いときなど自分の将来がまだまだ続くと認知しているとき、人は長期的な社会的目標に力点を置くので、たとえ一時的に感情を抑圧することになったとしても、新たな知識や経験を求める (Information seeking) ことを優先させる。これに対し、加齢などに伴って自分に残された時間が限られていると認知するようになると、人は短期的な社会的目標に力点を置くため、知識の習得よりも自分の感情を調節し (Emotion regulation)、不快な思いをせずにすむことを優先させるようになるのである。

Carstensen (1992) によれば、男女50名に対して17,8歳、30歳、40歳、50歳の各年齢において、①知り合い、②子ども、③親、④配偶者、⑤兄弟、⑥親友の6つの人間関係における接触の頻度や関係の満足度を尋ねた結果、年齢にともなって一番接触の頻度が少なくなった関係が知り合い関係であったこと、同じ年齢の変化の中でも配偶者や子どもなど親しい関係では接触の頻度が変わらないか増加していたことが明らかになった。この結果により、年齢が高くなると自分の感情の調整が優先されて、自分の感情を乱すかもしれない知り合い程度の関係とは疎遠になり、より親しい間柄だけが残っていくことが示唆され、SSTの実証的な根拠となり得るとされる。

3-2 ボランティア活動への参加動機と年齢との関連

SSTをモデルとしてボランティア活動への参加動機と年齢との関連について調べた研究を2つ提示する。それらの知見をもとに、向社会的な行動に対する動機づけについて、青年期と中年期以降とで重視される要素が異なる可能性を示す。

ボランティア活動への参加動機と年齢との関係を調査した研究は国内にはあまり見られないが、Davila & Diaz-Morales (2009) はVFIを用いて参加動機と年齢との関係を研究している。彼らはVFIの下位尺度である「enhancement」5項目のうち「ボランティア活動は、新しい友達をつくる手段になる」の1項目を除き、この除いた項目を新たに「making friends」と

して人間関係をつくることを参加動機とする下位尺度の一つとして新たに加え、7つの下位尺度をもつ参加動機測定尺度として用いて、214名のボランティア活動参加者に対し質問紙調査を行い、年齢がボランティアの参加動機に及ぼす影響について検討した。彼らはその際、SSTをモデルとして援用している。

その結果、より年齢の高いボランティア活動参加者は、年齢が低い参加者に比べて「career」「understanding」については減少すること、「protective」については年齢が有意な影響を及ぼすことが明らかになった。この結果により、年齢が低いと自分の職業上の経歴や技術や経験のためというように将来に向けた目標のためにボランティアに参加する傾向が高く、年齢が高いとボランティア活動によって個人的な問題を解決したり気持ちを紛らわしたりするように、自らの感情を調整することを目的とする傾向が高いことが確認された。ただ、「enhancement」については、年齢の有意な影響が確認されなかった。この点は、SSTの理論を支持しない結果であった。

上床（2015）は、同じくSSTを前提に置きながら、VFIによってボランティア活動への参加動機を測定した。そのうえで、ボランティア活動への満足度についても測定し、ボランティア活動への参加動機、満足度、年齢との関連について調べた。その結果、年齢と参加動機の下位尺度の間に有意な相関関係は見出されなかった。そのうえで、以下の群分けによるVFIの下位尺度得点の分散分析を行った。すなわち、年齢によって10代後半から20代前半までの青年期後期、20代後半から30代までの成人初期、40代以上の中年期以降に分類し、さらにボランティア活動への満足度の高低によって6つの群に分けた。

その結果、年齢と満足度の組み合わせによって、参加動機の質が異なる可能性が示唆された。すなわち、ボランティア活動への満足度が高い場合には、青年期後期の人は成人初期の人に比べて、新しい考え方や方法を学ぶことをより重視してボランティア活動に参加しようとする、中年期以降には、ボランティア活動への満足度が高いほど純粋に他者を思い遣る気持ちからボランティア活動に参加しようとする傾向にあることが確認された。まとめると、単純な相関関係についてはSSTを支持しないものの、年齢と満足度の組み合わせによって、部分的にSSTを支持する結果が得られたと解釈された。

これら2つの研究は、SSTをモデルとしてボランティア活動への参加動機と年齢との関連について調べた研究であった。その結果は、参加動機と年齢との単純な相関関係については整合性が取れない結果となっているものの、青年期において新たな考え方やスキルを学ぶことが主な動機づけとなっている点は一致している。また、より細かく年齢と動機づけとの関連について調べた場合、理論的に想定される動機すべてではないものの、以下の点でも同様の結果が得られている。すなわち、成人初期以降では自身の気持ちを紛らわす動機づけが増加したり、ボランティア活動への満足度によって純粋に他者を思いやる気持ちからボランティアに参加するかどうか左右されたりするなど、自身の感情調節をより優先した形での動機づけの傾向がみられる。したがって、年齢とボランティアの参加動機との関連性について、ひいては青年期以降の向社会的行動の動機づけの発達について、SSTを参照枠として考察することには一定の有用性があると考えられる。

3-3 青年期までの発達過程との比較

最後に、本稿で整理された青年期以降の向社会的動機づけの発達過程と、これまでに明らかにされてきた青年期までの向社会的性やその発達過程とを比較して論じる。ここまでみてきたように、青年期以降の向社会的動機づけについて、ボランティア活動への参加動機と年齢との関連性を調べた研究は、SSTを部分的に支持する結果となっている。すなわち、本稿で整理された青年期以降の向社会的動機づけの発達過程では、青年期から成人初期あたりまでは新たな考え方やスキルの習得が主な動機づけとなっているのに対し、中年期以降では自身の感情調節をより優先した形での動機づけとなっていることが伺える。

まず、こうした動機づけの変容を、青年期までの動機づけ理論の延長線上に位置づけることを試みる。乳児期にはイフェクタンス動機づけとして環境に働きかけることそのものに生来的に動機づけられていたところに、幼児期以降にマスタリー目標、さらにはパフォーマンス目標が加わり、学童期以降はとくに、活動そのものよりもその結果得られる評価に動機づけの比重が移っていくというのが、青年期までの動機づけ発達であった。これに対して、本稿で整理された青年期以降の動機づけ発達は、活動から得られるものよりも、活動そのものに心理的な価値を見出しているというようにみえる。だとすれば、青年期以降の動機づけ発達は、パフォーマンス目標よりは、マスタリー目標やイフェクタンス動機づけの方が、概念的には類似しているのではないだろうか。もちろん、マスタリー目標はスキルを向上させることそのものに価値を見出している点が異なり、イフェクタンス動機づけは認知的な発達や社会的な価値観の取り入れがほとんどないことが前提となっている点が相違点となる。しかし、活動そのもの、環境に変化を与えていると感じられることそのものへの動機づけという点では、年齢を重ねるほど、より生来的な動機づけに近いものが向社会的行動の動機づけとして機能しているといえるのかもしれない。

次に、青年期までの向社会的性の発達に関して比較する。乳幼児期には生来的で内的に動機づけられていた向社会的性は、幼児期以降において社会化、認知能力の発達、暴力性との接触経験などの要因が絡み合いながらその性質が変容し、戦略性や選好性を持つようになる。このことと、中年期以降では、満足度の高低によって、純粹に他者を思いやる気持ちからボランティアに参加するかどうか左右されるという結果（上床、2015）を比較する。当然、中年期以降においても戦略性や選好性、すなわち社会的な評判やその人が援助されるに値するかどうかの検討が動機づけに影響することは考えられ、この点はおそらく青年期までの発達において身についた向社会的行動の動機づけと同様であると考えられる。しかし、中年期以降で異なるのは、ただ単に利他的な動機ではなく、そこに活動への満足度が関わっているという点である。換言すれば、社会的な規範を内在化した価値観に基づいて向社会的な行動をしているという側面は、中年期以降にも確かにあるのだが、青年期までと違って規範により縛られない形で向社会的な動機づけが生起している可能性がある。これは、さまざまな経験から社会的な価値観を内在化していく途上にある青年期までとは、大きく異なる特徴であると考えられる。

最後に、本稿において扱うことができたのは、あくまでボランティア活動への参加動機と年齢との関連からみた青年期以降の向社会的動機づけの発達過程である。取り上げることができた研究は多いとは言えず、結果の整合性が取れていない部分もある。また、ボランティ

ア活動以外の日常的な場面においても、向社会的な行動やその動機づけの対象となる現象は数多くあるはずである。本稿は其中で限られた範囲ではあるが、関連する知見を整理し、考察を加えることを試みたものである。青年期以降も含めた生涯発達の視点や、向社会的動機づけの発達についての研究は、今後ますます必要とされるであろう。

引用文献

- Anderman, E. M. , Austin, C. C. & Johnson, D. M. 2002 The development of goal orientation. In A. Wigfield & J. S. Eccles (Eds.) Development of achievement motivation (pp197-220). New York : Academic Press.
- 安島進市郎 2003 「NPOにおけるボランティア満足—プログラム利用者としてのボランティア—」『社会・経済システム』24, 73-79.
- Carstensen, Laura, L. 1992 "Social and emotional patterns in adulthood: Support for socioemotional selectivity theory", *Psychology and Society* Vol.7, pp.331-338.
- Carstensen, Laura, L. 1995 "Evidence for a life-span theory of socioemotional selectivity", *Current Direction in Psychological Science*, Vol.4, pp.151-156.
- Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R. D., Copeland, J., Stukas, A. A., Haugen, J. and Miene, P. 1998 "Understanding and Assessing the Motivation of Volunteers: A Functional Approach", *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.74(6), pp.1516-1530.
- Davila, Maria Celeste & Diaz-Morales, Juan Francisco 2009, "Age and motives for volunteering: Further evidence", *Europe's Journal of Psychology*, Vol.2, pp.82-95.
- 伊藤順子 2004 「向社会性についての認知はいかに行動に影響を与えるか：価値観・効力感の観点から」『発達心理学研究』、15 (2) , 162-171.
- 伊藤忠弘 2011 「ボランティア活動の動機の検討」『研究年報』58, 35-55.
- 石本雄真 2004 「大学生のボランティア活動の動機」『日本青年心理学会大会発表論文集』12, 40-43.
- 鹿子木康弘 2014 「発達早期における向社会性：その性質と変容」『発達心理学研究』、25(4), 443-452.
- 木村 早希・川市 幸代・大木 桃代 2009 「ボランティア活動による精神的満足度の検討」『生活科学研究』31, 85-94.
- 三好達也 2004 「ボランティアの実態に関する一考察」『佛教大学教育学部学会紀要』3, 267-278.
- 内閣府国民生活局 2013 「国民の幸福感の現状、ボランティア・支え合う活動（「新しい公共」）、国民の意識とニーズ」『内閣府』（http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/h23/23senkou_02.pdf）
- 西川正之 2000 「援助とサポートの社会心理学」『21世紀の社会心理学』4, 82-93.
- 坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫 2002 「大学生における Volunteer Function Inventory の交差妥当性の検討」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』9, 24-31.
- 坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫 2004 「地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性」『東京保健科学学会誌』7(1), 17-24.

- 全国社会福祉協議会 2002 「全国ボランティア活動者実態調査報告書」『全国社会福祉協議会』
- 高崎文子 2019 「動機づけの発達」『新動機づけ研究の最前線』、146-165. 北大路書房.
- 上床幸太 2015 「ボランティアへの参加動機と年齢、満足度との関連についての研究」『大阪大学人間科学部卒業論文』.
- 山本琢俣・上瀧寿 2021 「向社会的行動の対象による向社会的動機づけの差異——青年期初期の子どもを対象に」『パーソナリティ研究』、30(2), 86-96.
- White, R. W 1959 Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, 66, 297-333.